



IUMS 札幌 2011

高峰讓吉・北里柴三郎展およびシンポジウム始末記

山本 綽

国際微生物連合 (IUMS) 2011 会議は、2011 年 9 月 6 日から 16 日まで札幌市のコンベンション・センターで世界 65 カ国から 4800 名の参加者を得て開催された。高峰・北里両博士の展示は、この期間の前半、9 月 6 日から 11 日まで、同センターの大きなレセプション・ルームで高峰博士と北里博士が左右に向き合う形で行われた。この部屋は体育館ほどの広さで、天皇陛下のご臨席を賜ってレセプションが行われた場所である。陛下は高峰博士と北里博士の肖像画に挟まれた中央にお立ちになられたのである。また、同様に陛下のご臨席を仰いで 9 月 10 日に行われた記念式典会場は同センターのメインホールであった。これは 900 人収容の大きなホールだが、これまた両博士の功績を紹介した 3 時間におよぶシンポジウムの場でもあった。

そもそも前回の大阪会議から今回の 21 年ぶりの日本開催、それも札幌開催となった本会でこのような展示とシンポジウムが可能となったのは、大会組織委員長の北大名誉教授富田房雄先生の多大なご尽力と、北里研究所始め多くの関係者のご協力が得られたからで深く感謝したい。IUMS という学術会議が近く日本でもあるらしいということは噂として耳には入ってきたが、まさかその本会議で日本が誇る微生物学の両泰斗の展示とシンポジウムをやることになるとは夢にも思っていなかった。2 年前の 2009 年の大晦日に突然富田先生よりご提案があったが、それは学会が行うことで、筆者は協力するだけと思って気楽に「両博士のシンポジウムはいいですね。ぜひやりましょう。ご協力申し上げます」と返事をしたら「全部やってくれ」となった次第。富田先生とは長い付き合いで筆者は記憶になかったが、1976 年に当時の協和醸酵社長の故木下祝郎さんに頼まれて同社の研究所で講演した時に筆者の拙い講演を聴かれた一人であると先生に言われた時は驚きでもあった。それ以来、ある酵素の共同研究などいろいろな場で先生とは出会いがあった。

また、大の高峰ファンであるラトガース大学のジョアン・ベネット先生は本会議 IUMS の副会長でもあり、展



写真1. 展示会場にて、(写真右から)富田房雄大会組織委員長、ジョアン・ベネットラトガース大教授 (IUMS 副会長)、春日文子日本学術会議副会長、筆者。



写真2. シンポジウム会場で講演するベネット先生。この会場は天皇陛下のご臨席を仰いだ式典会場である。

示とシンポジウム計画を推進するのにお力添えがあったことはいうまでもない。費用の面では特に第一三共株式会社と北里研究所にお世話になった。両社がワクチン事業で提携し、合併会社が生まれたのが 2011 年 4 月とタイミングが良かった。北里博士は 1904 年のセント・ルイス万博に高峰博士のお誘いで、塩原又策氏の案内で訪米している。塩原氏はタカチアスターゼの輸入販売のために三共商店を作ったのである。三共商店はその後三共

著者紹介 新日本化学工業株式会社 (顧問), NPO 法人高峰讓吉博士研究会 (理事長) E-mail: yama@snc-enzymes.co.jp

株式会社となり、高峰博士が社長、塩原氏が専務、そして北里博士は鈴木梅太郎博士や桜井錠二博士など多くの科学者とともに高峰博士の要請で株主となっている。従ってこの合併事業は、それ以来ほぼ100年ぶりの両博士の再度の握手となろうか。もちろんご両人はすでに他界されてはいるが。

北里博士がセント・ルイス万博で訪米した時、高峰博士はミシガン湖上で舟遊びに案内しており、その当時の写真が残されている。おなじ場面だが第一三共が所有している写真は左側から写した写真で、北里研究所所有のそれは右側から写した写真である。この2枚の写真を向かい合わせるようにして展示した。これを中心に両博士とも15枚ずつのパネルでそれぞれの功績を紹介したが、歴史に関心のある沢山の研究者および一般市民の来場を得た。両博士とも現在では知名度も下がり、知る人が少なくなっている。特に高峰博士は日本のためにアメリカで骨を埋めたこともあってか、知らない人が増えている、というか“知らないのが常識”というのが現状である。訪れた多くの人にこれだけの功績があって人類のために役だってきたことを知っていただけたと思う。

展示品として、5つの陳列棚にできるだけ多くの遺品や参考となる書類・書物などを飾り、故人の遺徳と功績を紹介させていただいた。北里博士の破傷風菌発見の決め手となった嫌気培養装置も展示した。高峰博士から北里博士に送られたセント・ルイス万博への招待状とニューヨークのレストランでの会食のメニュー（参加者全員のサイン付）も飾っていただいた。それにしても北里柴三郎記念室の遺品などの整理・保管の良さには感心させられた。高峰博士からの6通の手紙が封書からすべて保管してあった。高峰博士側が持っているだろうと思われた北里博士の手紙は1通も見つかっていない。高峰博士亡きあと、高峰夫人キャロラインさんの再婚、戦時

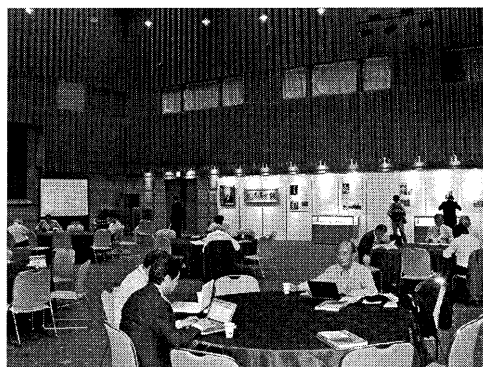


写真3. 展示会場（高峰譲吉側）、ここで天皇陛下のご臨席をいただいたレセプションが開かれた。

中の外国資産の没収、戦後から現在までも続く企業買収の荒波などで史料は散逸してしまったのは残念である。北里博士の史料がその後の関東大震災や東京大空襲などの危機を乗り越えてしっかりと保管されていたのは羨ましいかぎりである。

9月9日に行われたシンポジウムでは、高峰博士については3人、北里博士については2人、合計5人のスピーカーが博士の偉業を紹介した。ジョアン・ベネット先生は「高峰博士とバイオテクノロジーの誕生」、著者は「高峰博士から始まる酵素産業の歴史」、NPO 高峰譲吉博士研究会副理事長の滝富夫氏は「サムライ化学者高峰譲吉は郷土愛に燃えた事業家であった」と続き、ドイツ科学アカデミーのユルグ・ハッカー博士は「北里博士につづくワクチン事業の現在」、北里研究所の森孝之博士は「治療よりも予防を」と願った北里博士の偉業」について熱い思いを持って語っていただいた。

この2人の微生物学の巨人の功績を100年後の今日、再度見直して科学が社会へ大きく貢献できることを確認し、学ばれた若き学究の徒も多かったことと思う。

